世話焼き男の物作りスローライフ2

Sewayakidoko no monodukuri slow life

悠木コウ
Yuki Kou

Illustration 又市マタロー

ドリアード

古くからある森に棲む木の精霊。
森を異変から救うため、
人間に助けを求める。

アニス

伯爵家お抱え商家の娘。
ユータとも仲が良い。

神　様

ユータを転生させ、神子を導く
使命を課した。不思議な空間
『記憶の図書館』に現れる。

ハンス

魔導具研究の第一人者で、
ユータの発明品に惚れ込む。
本職は宮廷魔道士。

カイル

ユータの兄。
剣の腕前は大人顔負け。
どこまでも脳筋。

ルスリア

王都にある公爵家の令嬢。
カイルを慕っている。
異様にポジティブな男装の麗人。

ドラウクロウ

ユータに引き取られた魔物。
神に至る資質を持つ、
『神子』でもある。

ユータ

本編の主人公。
日本から転生した元おじいさん。
今は伯爵家の世話焼き次男坊。
魔導具を発明する。

MAIN CHARACTERS

主な登場人物

第一話　新たな始まり

日本から異世界に転生して七年、自分――ユータ・ホレスレットは都市エーベルの領主の家で、のんびりと暮らしていた。

魔法が使えないというハンデを背負ってしまったものの、自分には二つの特別な力があった。

一つはどんな言語も任意の言語に変換できる力。例えば古代の文字を脳内で日本語に変換して読むことができる。書く時も同様だ。ただし、これは読み書きのみに限定される。

もう一つは『記憶の図書館』だ。これは前世の知識が本の形になって収納された空間で、不思議な本を開くことでそこへ移動できる。

この二つの力を使って、自分は魔導具を開発し始めた。

魔導具とは、魔法と同じような現象を引き起こす道具のこと。詠唱を使わず、魔力を流すだけで魔法を発動出来る優れものだ。自分はポンプやドライヤーなど、前世にあったものを魔導具として、あるいは魔導具で工作して再現した。

魔導具開発に精を出していたある日、自分の前に〝神〟を名乗る人物が現れた。その神様曰(いわ)く、

自分には『神子』という存在を導く役目があるという。
神子というのは神様になれる資質を持った存在で、この世界にはその神子達が何人かいる。何でも前世で人助けばかりしていたのが評価されて、自分が彼らの導き手に選ばれたのだそうだ。
最初の神子が現れると聞いて、王都で開かれた舞踏会に参加したが、そこで自分と家族は大騒動に巻き込まれる。暴漢達が乱入してきて、会をめちゃくちゃにしたのだ。
その一味に魔導具で操られていた神子をどうにか正気に戻し、家に連れ帰ったのだった。

都市エーベルに帰還して数日が過ぎた。
王都で開かれたエヴァレット公爵様主催の舞踏会で騒動はあったものの、大きな怪我もなくこうして屋敷に帰ってくることができた。
事件の首謀者については現在も調査中とのこと。後は王都の人達に任せるしかない。
しかし、あの場に神子がいると教えてくれた神様は、何か知っているのではないだろうか？
自分と神子は自然に巡り合う運命だとも言っていたが、今回王都に行くように促したのは神様だ。
今度記憶の図書館で神様と会った際に、それとなく聞いてみるとしよう。
ひとまず神子は屋敷に連れ帰ることができたので、彼と話でもしてみようかな。
彼は魔物だ。人間の言葉がわかるらしいが、話すことはできない。自分も魔物の言葉がわからないので、言葉による意思疎通は無理だと思っていた。

だが、自分には転生時に付いてきた、他言語を別言語に変換できる力がある。
これにより、魔物の扱う言語を文字に起こしてもらい、自分の脳内で人間の言葉に翻訳することで、筆談が可能になった。
彼らにも文字という概念が存在し、かつ彼がその文字を書けたお陰で、意思の疎通が図れた訳だ。
筆談を介して、色んなことがわかってきた。神子の名はドラウクロウ。見た目は白い体毛のライオンに似ているが、地球動物とは違う部分が存在する。
彼の頭部には鋭い二本の角が生えているのだ。そして先程も挙げた、人間の言葉を理解できる知能を有する。
これは神様が自分と出会う少し前に与えた力らしい。
魔物については詳しくなかったので、近いうちに調べてみたいところだ。
ともかく、今回に関しては言語変換能力に感謝しかない。
一時はこの力のせいで魔法が扱えないのだと思っていたが、良い点もしっかり存在したので案外悪くないと思えてきた。
もしかするとこの力は、神様が神子を導くために授けてくれたのかもしれない。
ちなみに、魔物自身は自分が神子であるとは知らない。
自身が特別な存在だと知らない状態で、人間やこの世界のことを教えてやってほしい、と神様から頼まれている。

まあ、何はともあれ今から神子の元に赴くとしよう。

一階の客室に足を運び、ドアをノックした。

現在時刻は午前の十時頃。

朝食時には眠っていたがさすがに目を覚ましているだろうと思い、徐にドアを開けた。

「ユータだけど、失礼するよ」

カーペットを敷いた床に横たわる、白い体毛の魔物が目に入る。

王都で出会った時とはすっかり変わり、痩せぎすだった身体には肉が付き始め、薄汚れていた体毛は純白だ。

「体調は良くなった？」

そう聞くと彼は、近くにおいてあった板――筆談用のものだ――に爪を走らせる。

今彼が文字を書いている板は自分が作った魔導具だ。

板は削られても、任意のタイミングで修復でき、何度でも使える。黒板のような魔導具といった感じか。

書き終わったらしく、ドラウクロウが板をこちらに見えるよう反転させる。

そこには魔物の言語で文字が刻まれており、それを文字と認識した自分の頭が翻訳する。

『既に本調子に戻っている。身体を動かしたいのだが、許可はもらえないだろうか？』

「元気になったのは良いことだけど、身体を動かせるかは父さんに聞いてみないとね。それに、君と言葉を交わせるのは僕だけだから、ちょっと慎重にやろう」

既に屋敷内では、ドラウクロウが言葉を理解することも、意思の疎通が可能なのが自分だけということも周知されている。

意思疎通の方法については、家族以外には伏せている。

裏を返せば、自分が他言語を理解できる能力を持つことを、家族には明かしたということだ。

魔導具を作れることに加えて、この力についてもひとまず言いふらさないようにする、と父さんと約束した。

しかし、ドラウクロウの存在や知能の高さは周知されたものの、魔物というだけで怖がる者もいる。

いくら彼が人の言葉を理解していようが、皆は彼の言葉がわからないのだ。

故に使用人達を怖がらせないように、ドラウクロウは屋敷内を自由に歩き回るのを禁じられていた。

予め父さんに許可を取った上で、自分が付き添ってようやく部屋を出られる。

彼はこれに異を唱えず従ってくれているが、このままというわけにもいかないだろう。

自分は神様から神子の指導者の任を与えられている。

ドラウクロウに人間の世界をもっと知ってもらわなければならない。

それにはまず、行動の自由を手にできなければ話にならない。
そのためには、ドラウクロウの安全性を知ってもらうのが良いだろう。
障害となるのはやはり、言語の壁だ。
「そうだ！」
閃きから突然声を上げて、ドラウクロウを少しびっくりさせてしまったが、構わず言葉を続ける。
「ドラウの使ってる魔物の言語に名前ってある？　人間が使う言葉はアドルリヒト語って言うんだけど」
現状では意思疎通ができる能力を持ちながらも、言語の壁に邪魔をされている。
だったら、無限の可能性を持つ魔導具でそれを取っ払ってしまえばいい。作れるかどうかはまだわからないものの、試す価値はあった。
こちらの問いにドラウが答える。
『魔物が主に使用するのはモンストルムという言語だ』
モンストルム。それが彼ら魔物が主として使う言語の名か。
言語変換の力によって『モンストルム』という言葉として認識できているが、実際に書かれているのは文字というより図形に近い。
ともかく、このモンストルムという言語をアドルリヒト語に翻訳できるような魔導具を作ってみよう。

そう考え、魔導具を作るためにドラウを自室へ連れて行くことに決めた。

父さんからドラウの行動の許可を取り、現在は彼と一緒に二階の自室にいる。
これから魔導言語を用いて翻訳の魔導具を作るのだが、その前に道具の形をどうするか決めなければならない。
安直に首輪型を思いついたが、そういえばドラウと王都で出会った時、彼は首輪によって身体を強制的に操られていた。
良い思い出ではないだろうから、首輪は避けてピアスや腕輪の方がいいか。
一応、ドラウにも意見を聞いてみた。
すると、彼は持ってきていた板に文字を削り込む。
『魔導具の形は首輪でも構わぬ。我が嫌っているのは身体を蝕んでいた靄の方であり、首輪ではない』
こちらが文字を読み終えたと目線から読み取ったらしいドラウは、新たに文字を書いた。
『寧ろ、首輪の方が良いだろう。ひと目で御されていると伝わる』
「ドラウがそう言ってくれるなら魔導具は首輪を象ることにするけど、着けてみて嫌だったら遠慮なく言ってね。絶対だよ」
『善処しよう』

遠慮気味な彼に少し不満を抱きながらも、早速作業を始めた。
「うーん、参ったな」
素材棚を見たところ、色々と材料が不足していることがわかった。
これでは、ちゃんとした首輪は作れそうにない。ドラウには悪いが、今回は適当なもので代用しよう。材料の補充を父さんにお願いしないといけないな。
棚にあった適当な鉱石を持ってきて、愛用している手袋の魔導具を装着して実製作に入る。
手袋の内側に刻んである魔導言語『物質変形』を使って、必要な分の鉱石を取り分けた。
そして、ドラウの首の太さを大まかに計測して、先程分けた鉱石を輪っかの形に変えていく。
形が整ったら切り込みを入れ、両方の切断面に凹凸(おうとつ)を作り、はめ込み式で着脱できるよう作り変える。
それが終われば、ペンを使って魔導言語の刻み込みだ。
まずは、首に合うよう大きさが変わる『着用調整』の魔導言語を刻む。
その後に『モンストルム語をアドルリヒト語に翻訳』という言葉を続けた。
前にドライヤーの魔導具を作った時にも使用した、普通の文字を魔導言語化するやり方だ。アドルリヒト語の文章に魔力を流しこめば、魔導言語に変わる。
しかし、文章系は効果を正確に指定できる分、文字数がかさむので、魔力とスペースに余裕がないと使えないのが難点である。

ともあれ、これで首輪型翻訳魔導具が完成した。
実際に使えるかどうかを早速試してもらうとしよう。
「魔導具、完成したよ」
ドラウに声を掛けると、彼は立ち上がりこちらに寄ってきた。
彼の表情から着けてくれという意思が読み取れたので、一言かけてから首輪を装着する。
「首輪が苦しかったりしない？」
そう聞くとドラウは喉の調子を確かめるように声を出してから、口を動かした。
「問題ない」
「それなら良かったよ。言葉もちゃんと伝わってるし、翻訳機能の方も問題なさそうかな」
この世界では生物が生きる上で魔力は必要不可欠。
身体を休めれば回復するが、活動時は無意識のうちに極微量(ごく)の魔力を体外へ放出している。
どうやらこの首輪の魔導具は、その体外へ放出される魔力を利用して力を発揮するようだ。
魔導具の発動要因は様々だ。自分が先程使用していた手袋の魔導具の『物質変形』は、意識して魔力を込めなければ発動しない。
さて、しっかり魔導言語が働いているようだし、引き続き性能のチェックを行おう。
それが終わったら、父さんにドラウが言葉を話せるようになったことを報告しなくては。
もしかしたら、行動の制限を緩めてくれるかもしれない。

その後は、兄さん達と話している様子を屋敷内で皆に見せて、ドラウに慣れてもらう作戦で行こうかな。

「それじゃあ、魔導具の確認をしてから父さんの所へ行こうか。これでドラウへの印象を変えてもらえれば良いんだけどね」

魔導言語はこの世の理に触れて、魔導具に力を付与する。

であれば、その言語を構成する魔導文字は世界を形成する要素でもあり、この世界は文字で作られていると言っても良いのではないのか。

そんな突拍子もないことが、ハンスさんの著書に書かれていたのを思い出した。

ハンス・アルペラードさん。魔導具の開発に現代で一番力を入れている人で、魔導具に関する本を多く書いている。

彼とは先日の王都での事件が落ち着いた後に、エヴァレット公爵家のダンスホールで出会った。

父さんと知り合いだったハンスさんは、父さんが身に着けていた魔導具や魔装を作ったのが僕だと知り、驚いた。そしてあろうことか、遥かに年下である僕に魔導言語について教えて欲しいと言ってきたのだ。

その熱意と狂気じみた魔導具への愛に気圧され、つい魔導言語について教える約束を交わしてしまった。

実を言えば自分では力不足だと思っているのだが、約束は約束なので後日ホレスレット家を訪ねてくることになっていた。

何故、ハンスさんのことを思い出したのか。

それは、執務室に来たところ、自分宛てにハンスさんから手紙が届いていたからである。

「悪いと思ったが先に読ませてもらった。内容は、仕事を片付けたらすぐにこちらに向かうとのことだ」

一つ呼吸を挟んだデルバード父さんは言葉を続けた。

「それと、これをカイルに渡しておいてもらえるか」

そう言って渡されたのは、エヴァレット公爵家の紋章が刻印された手紙だ。

「兄さんにだね。わかったよ」

手紙をポケットにしまいこみ、隣にいるドラウに一度目をやってから自分は口を開いた。

「それで、ドラウについての話なんだけど。実はドラウの言葉を翻訳する魔導具を作ったんだ」

「ほう。それは凄いじゃないか。まあ、だからといって、今日明日にでも自由行動を許そう……とはならないがな」

「まあ、そうなるよね」

そう簡単に許可は下りなかった。わかっていたつもりだったが、もしかしたらという期待があったのは確かだ。

父さんは諭すように言った。
「だから今日のところはカイルの元へ連れて行って、ドラウクロウが人の言葉を話せるようになったことを少しでも広めた方が良い」
父さんはさらに言葉を続ける。
「屋敷の者達も一日二日では慣れないだろうが、同じ言葉を話せるのであれば少しずつ彼を理解してくれるだろう」
そう口にした父さんの視線は隣のドラウへ向けられていた。
ドラウが魔物であっても、既に屋敷の一員として認めてくれているのだろう。
ドラウを『彼』と呼んだことからもそれが伝わってきた。
「ありがとう、父さん。急いでも仕方ないし、ゆっくり状況を変えていくよ」
言葉の後で、隣にいるドラウに小声で謝った。彼は首を横に振る。
「私の存在が周知されればいずれ行動の制限も緩くなるだろう。今気にしても詮無きことだ」
励ましてくれたらしい彼に、自分はありがとうと返した。
その後、主にドラウのことについて話をしてから、自分達は執務室を出た。
今は兄さんの元へ移動中だ。
「それにしても驚いたよ」
「何がだ？」

「ドラウが捕まっていた理由だよ」
先程ドラウについて聞いていると、彼が『隷属の首輪』という道具――おそらく魔導具だろう――で従わされていた理由と経緯がわかった。
彼は元々、ホレスレット家が治めている、エーベルとは別の領地――フリアントにある森にいたらしい。
そこで箱罠に入った餌に誘われ、敢えなく捕まってしまったとのことだ。
「え、そんなイノシシみたいに!?　って言葉が危うく出そうだったよ」
「その少し前から身体から力が抜けるようになってしまっていてな。それ故、上手く餌が取れず、腹が空いていたのだ」
「身体から力が抜ける、ねぇ。病気とかかな」
「原因はわからないが、自然現象の類かもしれないな」
ちなみに、隷属の首輪という名前は、捕まった時に聞いたのだそうだ。その時にはもう神様から力をもらっていたらしい。
話しながら歩いていると、廊下の窓から外の様子が見えた。
「あそこで手合わせをしてるのがカイル兄さんだよ」
指を差してドラウに伝える。
そこでは、兄さんが警備団の人達と一緒に訓練を行っていた。

「ほう、やはり良い動きをしているな。本調子ではなかったとはいえ、私が負けたのも頷ける」
首輪に操られるドラウを相手にした際、主に戦ったのは兄さんだ。
普段は脳筋すぎてどうかと思うこともあるけど、戦いとなればやはりピカイチの腕前だ。
「相手はガリアルか。彼は元冒険者だから騎士のような綺麗な戦い方じゃないんだよね」
二人の持つ木剣が幾度もぶつかり合う。
ガリアルは兄さんの小さな隙を見つけては、掴んでいた砂を投げつけたり足で砂を巻き上げたりする。さらに頭突きや足音への蹴りで、少しずつダメージを蓄積させていた。
「搦手を狙われているな。だが、翻弄されてはない」
「さすがは兄さんだね。あっ、兄さんの勝ちで決着がついた。それじゃあ行こうか」
ドラウはウズウズした様子で先を歩く。
彼に付いて訓練場まで足を運び、兄さんの近くまで行く。
「お疲れ様、兄さん」
開口一番に労いの言葉を掛けた。
「ああ、ユータと……」
兄さんは隣のドラウに顔を向けて、言葉に詰まった。
どうやら、名前を忘れているようだ。
屋敷内でドラウのことはそれなりに広まっているはずだが――そして兄さんは王都で戦った仲だが――まだ名前を覚えてはいなかったのだろう。
そんな兄さんの様子に気づいたドラウは口を開いた。
「ドラウクロウだ。改めてよろしく頼む」
「そうだった、そうだった。ドラウクロウだったな、よろしく。それにしても喋れるようになったのか」
「ユータ殿に魔導具を作ってもらったのだ」
「ああ、なるほど」
兄さんはドラウクロウが喋れるようになったことに大して驚かなかった。
父さんもそうだったが、これが普通の反応なのだろうか。
「先程の模擬戦を見させてもらったが、中々に面白い戦いだった」
「ドラウクロウほどの魔物にそう言ってもらえるのは嬉しいな」
「どうだ、我と一戦交えてみないか？」
身体を動かしたがっていたドラウは、兄さんに戦いを申し出た。
すかさず自分は止めに入る。
「今は駄目だよドラウ」
「何故駄目なのだ？　気軽に戦えるほどの仲だと周りにも伝わると思うのだが」
彼も彼なりに考えての発言だったらしいが、屋敷の皆がドラウのことをあまり知らない現状では

得策ではない。
「逆にドラウが襲っているように見えてもおかしくないよ。万が一誤解でもされたら困るから、今はまだ約束するだけにしてね」
こちらの説得に少し悩む素振りをしてから、ドラウは残念そうに返事をした。
「ふむ、仕方ないか。ではカイル殿――」
「――気軽に呼び捨てでいい」
「そうか、それなら私もドラウと呼んでくれ。ではカイルよ。いずれ我と刃を交えてくれ」
「ああ、その時はよろしく頼むよ」
納得してくれて、思わず安堵のため息が漏れる。
だが、このままだとドラウにもストレスが溜まるだろう。
早めにドラウのことを理解してもらえるよう、もう少しいい案を考えたいな。
「そうそう、兄さん宛に手紙が届いたそうだよ。はい、これ」
ひとまずそのことは頭の隅によけて、父さんから受け取った手紙を兄さんに渡す。
「この紋章はエヴァレット公爵家のものか」
そう呟いて手紙を受け取った兄さんは、徐に封を解くと内容を確認した。
「げっ……」
「変な声出してどうしたの？」

「近々ルスリアが来るようだ」
兄さんから差し出された手紙を受け取って、中身を確認する。
そこにはキザな愛の言葉に始まり、ドラウクロウのことを調べるという建前で遊びに来ると書いてあった。
こんな情熱的な文章を書くのもルスリア様らしい。
ルスリア様はエヴァレット公爵家の令嬢で、兄さんに好意を寄せている人だ。
舞踏会で見た彼女は男装の麗人といった見た目だった。性格も中々にユニークである。
「へぇ、それなら精一杯歓迎しないといけないね」
「はぁ～、しょうがないか」
大きなため息をついた兄さんに手紙を返す。
どうやら、相当面倒らしい。だが、嫌ってはなさそうに見える。
今回の訪問で仲を進展させることができれば、ホレスレット家としては嬉しいところだけど。
そんな考え事をしているところへ、唐突に声が掛けられる。
「ほう、そいつが噂になってた魔物ですか」
そちらに顔を向ける。声の主は先程兄さんと手合わせしていた、警備団のガリアルだ。
「その使い魔はいつお披露目になるんですかい」
「使い魔？」

その言葉に聞き覚えがなく、聞き返した。
「おや、違うんですか？　てっきり契約を交わしているものかと思ってたんですが」
彼は一つ間を置いて言葉を続ける。
「まあ、使い魔は滅多に見ませんからね。知らないのも無理はありませんか」
「その使い魔ってなんなの？」
自分の浮かべた疑問に隣のドラウが答えてくれた。
「使い魔とは人間に使役される魔物のことだ。人を信頼した魔物は血の契約魔法が使えるようになると言われている。その魔法に人間が同意すれば、契約が結ばれるのだ」
「魔物なだけあって、よく知っているな」
ドラウの言葉にガリアルは感心するように頷いた。
その契約を交わせば晴れて魔物は使い魔となるわけか。使い魔という名前だが、使役される魔物の方から契約を結ぶなんて意外だな。
ドラウを使い魔にすれば、屋敷の皆がドラウへの印象を変えるのではと考えていると、ガリアルが気になることを話した。
「まあ、その契約魔法は魔物じゃなくても使えるらしいですがね」
てっきり血の契約魔法とやらは魔物だけが使える魔法かと思っていたのだが、人にも使えると知り興味が湧いた。

魔物が人に信頼を置いた時に発動するのであれば、人の場合何がキーになるのか。
詳しいところが気になり、ガリアルに聞いてみる。
「人間にも使える魔法なんだ。その契約魔法を使える人を知ってたりしない？」
「俺は知りませんね。そもそも、現在では契約魔法に関して伝承しか残ってませんよ。消えた理由っていうのも、契約魔法と言えば聞こえは良いですが、実態は魔物を無理やり隷属させるものだったんで、禁止されたらしいです」
話によると、どうやら人間が契約魔法を使っていたのは数百年前のことのようだ。
そして契約魔法の真実に心を痛めた一部の人達が、その魔法の存在を闇に葬ったらしい。故に現在では伝承しか残っていない。当然のように魔法を悪用する者がいたことにぞっとする。
「ん、隷属の魔法……？　ねぇ、ガリアルは魔物を隷属させる道具や魔法を知らない？」
「そんな物騒なことを聞いてきて、どうしたんです？　まあ、今はそんな物があれば大問題ですね。今の時代は人間はもちろん魔物の奴隷なんかもいませんし、必要ありませんよ」
「そうだよね。ごめんね、変なこと聞いて」
笑って誤魔化したが、疑問は消えない。つい最近までドラウは『隷属の首輪』の魔導具で身体の自由を奪われていた。
つまり誰かが禁じられた領域に足を踏み入れたことになる。
この世界で今、おかしなことが起きているのかもしれない。

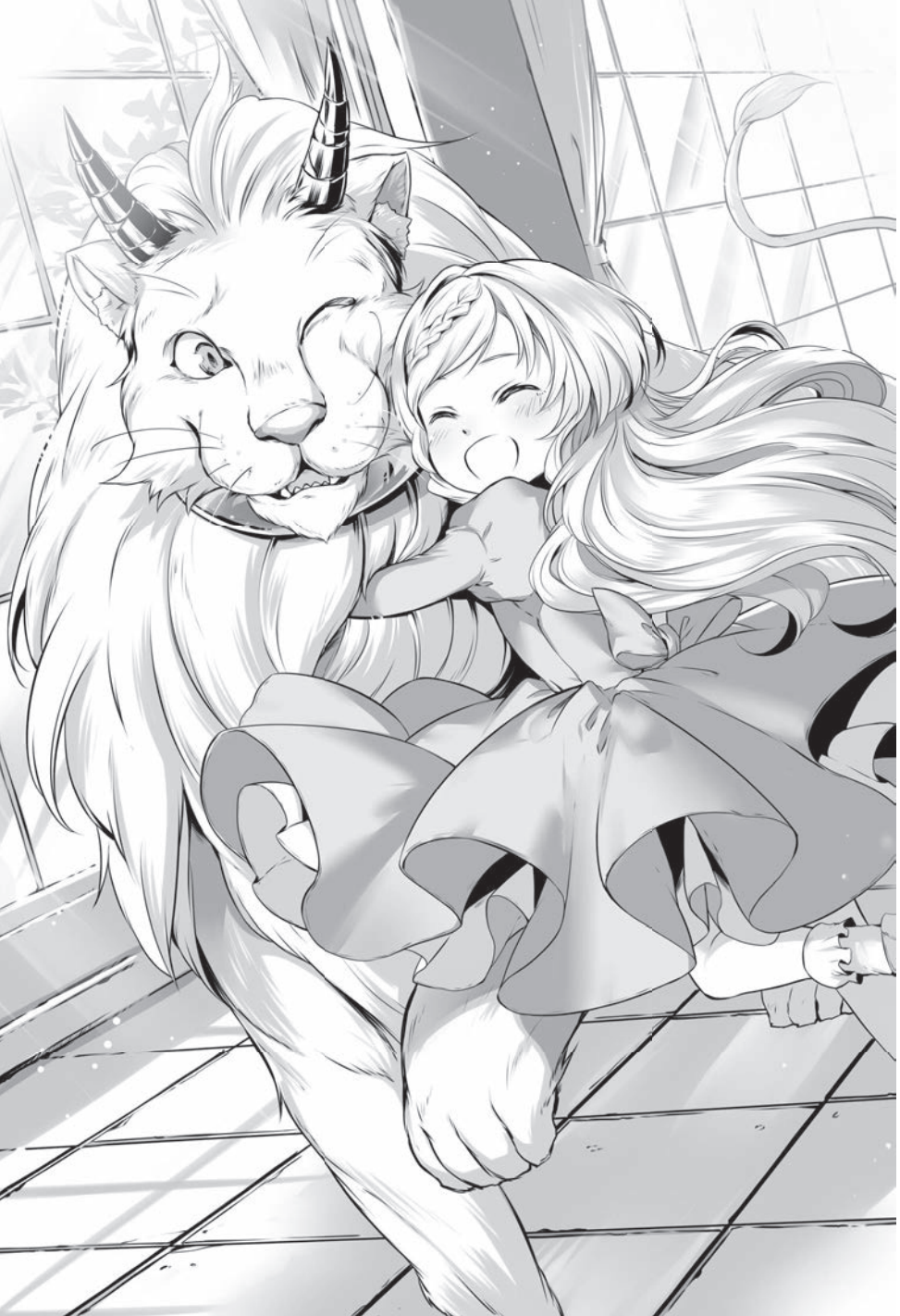
訓練場を後にした自分は、ドラウと一緒に屋敷内をうろついていた。
そんな折、掃除中のメイド――メイベルとモニカの二人を見つけた。
「お掃除ご苦労さま」
「これはこれは、ユータさ、ま……」
声を掛けると二人は振り向きざまに固まった。
その視線は隣のドラウへ向かっている。
それに気がついた自分は、魔導具によって喋れるようになったことを説明し、ドラウに話すよう促した。
「この屋敷で世話になっているドラウクロウだ。これからよろしく頼む」
「あっ、は、はい。よろしく……おねがいします」
モニカは依然として固まっているが、メイベルはどうにか声を出した。
だが、それでも言葉の後半は消え入りそうになっていた。
「やっぱりまだドラウのことを、怖いって思ってしまうのかな」
「……申し訳ございません」
「ああ、いや。別に責めてるわけじゃないからね。でも、具体的にどこが怖いのか教えてもらえないかな？」

参考にしたいのだと付け足して、二人に聞いてみた。
だが、モニカは口を閉じたままメイベルの後ろからこちらを見ている。
そんな彼女の様子を目にしたドラウは、少し距離を取った。
「そう、ですね。やはりドラウさんのような魔物と、こうしてお会い？　する機会がないので……。それと見た目が……」
メイベルの口からは遠慮がちながらも、ドラウに対しての正直な気持ちを聞くことができた。
「我の見た目はそこまで恐ろしいものなのか？」
後ろからドラウがぼそっと聞いてきた。
自分は最初からドラウクロウが神子だとわかっていたので、恐怖心はあまり抱いていなかった。
だが、当然、他の皆はそれを知らないのだ。なので、一般人からすると普通に怖いらしいとやんわりと告げる。
「そうか……」
明らかに落ち込んでいるのが声色から伝わってきた。
自分も神子だと知らずに会っていたら、怖がっていてもおかしくない。
桃色の髪の一本も微動だにしないくらい固まっているモニカが、良い例だ。
ひとまず今日のところはこれ以上食い下がらない方がいいと思い、二人に挨拶（あいさつ）をしてから通路を引き返した。

「んー、正直ここまでとは思ってなかったかな」
あれから何人かと話したが、皆メイベル達とほぼ同じ反応を返してきた。
やはり、獣との接点が少ないメイド達は、ドラウの見た目に強く怯えている。
同じ言葉を喋れるからといって、簡単に仲良くなれるはずはないか。
前世に置き換えると、人の言葉を話すライオンが目の前にいるのと同義だろう。所詮は動物なので、いつ食われるかと内心穏やかじゃないはずだ。
だが、メイドの中でも、カミラからは貴重な別の意見を聞くことができた。
彼女は元冒険者だ。そのため、彼女だけ他のメイド達とは異なり、露骨に怯えた態度は見せなかった。仕事で魔物を目にしたことが何度もあるのだろう。
そんなカミラからも……見た目が怖いという意見をもらった。
「やはり、この姿が悪いのか……」
重要なのは、魔物を見た経験のあるカミラですら、ドラウの外見について言及したという点だ。
それほどまでに、ドラウクロウの外見は畏怖の念を抱かれている。
父さんやカイル兄さんは全く怖がらなかったが、あれは例外だったのだろう。
「自由が遠のくね」
落ち込むドラウの頭を撫でながら、なおも屋敷内をうろついていると、自分の世話をよくしてくれているメイド、ニーナの姿が見えた。
「ほら、落ち込んでる暇はないよ」
励ますように声を掛け、その後、まずは自分からニーナに挨拶をする。
そして今日、何度も行った挨拶をドラウは慣れた調子で口にした。
これに対する彼女の反応はというと――
「おや、ユータ様にドラウクロウ様。お出かけですか？」
――怯えも動揺も一切見えない、普段通りのものだった。
そのことに一番驚いたのはドラウである。
「わ、我のことが恐ろしくはないのか？」
「申し訳ございません。もっと怯えた方がよろしかったでしょうか？」
「いや、そうではない。ただ、我に怯えないことに嬉しく思っただけだ」
ニーナは人間と会話をするように、言葉を紡いだ。
「ユータ殿！　我に怯えない者がここに！」
「うん、わかってる。わかってるよ。少し落ち着いて」
先程まで落ち込んでいたのが嘘のように、ドラウははしゃぎだした。
その様は大型犬を彷彿させ、よほど嬉しかったのか、じゃれつこうとしてきたので、少し距離を取る。さすがにその巨体にのしかかられると、この小さな身体では押し倒されてしまう。

キャラの変わりように驚きだ。実は、これが本来のドラウなのかもしれないな。
興奮するドラウをひとまず落ち着かせ、自分はニーナに質問する。
「本当に怖くないの？」
「ユータ様のご様子から、ドラウクロウ様が悪いお方ではないとわかりましたので。それに、人の言葉を話すようになったと、モニカ達から聞いておりましたから」
ニーナの言葉を聞いて、ドラウクロウは口を開いた。
「ユータ殿は信頼されているのだな」
「ニーナみたいに、皆が信頼だけで恐怖心がなくなるなら問題はないんだけどね」
ドラウに苦笑いを返す。
だが、ニーナがドラウに怯えていないのは明らかだ。
心強い味方ができたので、早速あるお願いをする。
「ニーナ、良ければなんだけどさ、ドラウがみんなと仲良くなれる方法を一緒に考えてほしいんだ。何かいい案はないかな？」
奇抜な策で一気に現状を変えられれば良いのだが、そういったことは簡単には思いつかない。
ならば、一人で考えすぎるよりは誰かに頼った方が良い。
顎に手を添えて考える仕草をしたニーナは、少しの間をおいて口を開いた。
「では、こういうのはどうでしょう――親睦会（しんぼくかい）などは」

ニーナが提案してくれたのは無難ではあるが、一番堅実（けんじつ）な方法だった。
「親睦会か」
「ええ、ドラウクロウ様は魔物ではありますが、人間に劣らない知性をお持ちです。言葉も通じますので、ドラウクロウ様が私達と見た目以外、違いがないことを知ってもらえれば現状を変える一手になるかと。それに、少量でもお酒が入れば緊張や恐怖が和らぎ、ドラウクロウ様との距離も僅かながら縮まるでしょう」
「なるほど、やるにしても準備が必要だから、早くても一週間後かな。うん、ちょっと考えてみるよ。ありがとう、ニーナ」
「多少なりともお力になれたのであれば何よりです。それでは、私はこの辺りで失礼させていただきます。何かございましたらお呼びください」
うやうやしく礼をしたニーナと別れ、自分達は二階へと向かった。
取り敢えず当面の目標は決まった。親睦会を行うに当たり、ドラウクロウをより知ってもらうための案を考えないと。
「とはいっても難しいものだね」
「我のためにすまないな」
ドラウは申し訳なさそうな声色で言った。
「別に悪いことをしているわけじゃないんだから、謝る必要はないよ。でも、気になるなら一緒に



考えてほしいかな」
「ふむ、それではカイルと戦って我の強さを――」
「それは却下」
「むぅ……」
それほどまでに身体を動かしたいのか、弾んだ声で提案してきたがそれは却下せざるを得ない。
慰めるように彼の背中を撫で、一緒に考えながら自分の部屋に向かっていると、廊下の後ろからパタパタと走る足音がした。
振り返ると、そこにいたのは妹のアイリスだ。少し遅れてセレア姉さんも二階へ上がってきた。
妹はふわりとしたブロンドの髪をなびかせて、一心不乱にこちらへ走ってくる。
「とうっ！」
短く声を出して、次の瞬間には強烈なタックルを、ドラウクロウへと仕掛けていた。
「もふもふだ～」
自身を受け止めたドラウの、真っ白な毛に顔を埋めながらアイリスは声を出した。
追いかけてきたセレア姉さんもアイリスと同じことをしたいのか、ウズウズしている様子だ。
だが、姉としてのプライドがその欲求を抑えているように見えた。
「やあ、姉さん。アイリスと追いかけっこでもしてたの？」
「二人を探していたのよ。アイリスがどうしてもその子に会いたいって言ってたから」

「なるほど、ドラウが目当てね。それにしてもよく怖がらないね」
「どういうこと？」
疑問を投げかけてきた姉さんに、メイド達がしていた反応を伝えた。
「へぇ、彼女らはこの子を怖がってるのね。おかしいわね、私は可愛らしいと思うのだけれど」
ここまで見てきた反応からすると姉さん達の方がおかしいのだが、その言葉は呑み込んだ。
ドラウへ触れるのをためらっている姉さんと違い、アイリスは子犬のようにドラウにじゃれついている。
「みんなも姉さん達みたいだったら良かったんだけどね」
「そんなに怖がっているの？」
「そうなんだ。だから、親睦会でも開いたら良いんじゃないかってことになってね。どうかな？」
姉さんに意見を聞きつつ、ちらりとドラウの表情を窺う。
妹に身体を弄(まさぐ)られているが、どうやら嫌がってはいないようだ。
だが、どういう反応をしたら良いのかわからないらしく、困り顔でこちらへ視線を向けてきた。
自分はそんな彼の頭を無言で撫でる。
「親睦会、良いんじゃないかしら。みんなが仲良くなるのが一番よ」
ニヤニヤするのを必死に堪えながら、姉さんは恐る恐るドラウの身体に触れる。
そんな中、ずっとされるがままだったドラウクロウが口を開いた。

「そろそろ、解放してくれないだろうか」
「あらっ、あなた喋ることができたのね」
撫でる手は止めず、姉さんは言葉を発したドラウに少し驚く。
そして、首元を一瞥(いちべつ)して納得したように小さく頷いてから、自己紹介を始めた。
「はじめまして、私はセレア・ホレスレットよ。よろしくね」
「手は止めないのだな……まあいいが。我はドラウクロウだ。よろしく」
撫で続ける姉さんに、ドラウは苦笑いをこぼす。
だが、嫌がっている素振りはない。そのことに自分は安堵のため息をついた。
「ほらっ、アイリスも自己紹介をしなさい」
「もふもふ～」
姉さんの言葉が聞こえていないのか、妹はただドラウの身体に顔を埋め撫で回している。
「ハハハッ、しばらくは離れそうにないね」
アイリスはそうとうドラウクロウのことを気に入ってくれた様子だ。
当のドラウクロウはと言うと、なんとも言い難い表情を浮かべ、ただ身体を弄られていた。

第二話　ドラウクロウの過去

ここはネスティア王国にあるオルドレントの森。
その名は森の長である魔物の名前から付けられた。
長は巨大な木の魔物であり、エルダートレントという種族に属している。
千年以上の長い時を生きるトレントという種が力と知識を蓄え、より長い時を生きたものがエルダートレントになると言われている。
しかし、人間には知られていないが真実は別で、長い時を生き力をつけただけでは、トレント種から昇華できない。
本当にエルダートレントへ昇華できるのは、自身を守るための固有領域――森――を顕現させる力を得た時だ。
だが強大な力を得た代償か、その身体は森という固有領域から出ることができなくなった。
そんなエルダートレントが生み出した森に、一体の魔物が新たに入り込んだ。
（やはり人間は碌なのがいない）
新入りの魔物は内心でそう呟いた。

彼の名はドラウクロウ。
少し特殊な魔物である彼は、頭部に黒い二本の角を生やした、純白な体毛を持つ四足歩行の獣だ。
元々はここから離れた山の方で暮らしていたのだが、オルドレントの森へやって来た。
理由は至極単純で、彼を狩ろうとする人間から逃れるためである。
彼は珍しい魔物であるために、一つの場所に長居ができない。
新しい場所に引っ越しても、しばらくすれば目撃者から話が広まり、さらに少しの時が過ぎれば彼を探しに人間がやって来る。
数年前までは、ここまで彼を探し求める人間はいなかった。
ことの始まりは、人間にも契約魔法が扱えると判明したことである。
本来の契約魔法というのは、魔物と人間の間に絆が生まれた時、魔物側に目覚める魔法だ。
だが、人間にも使えるようになったことで、人間は魔物を奴隷のように認識し始めた。
もちろん、人間全員がそうというわけではないが、多くの者が魔物を下に見るようになってしまった。
（本当に人間は忌々しい存在だ）
ドラウクロウは歯を噛み締めながら、内心で呟いた。
人間は魔物と絆を結ばずとも、狙った魔物を使い魔にできる。
そのせいで、ドラウクロウはこのような状況に陥ったのだ。珍しい魔物であること、そして対峙

してわかる強大な力。それを求めて多くの人々が彼を追いかけ回していた。
苛立ちながらも彼は木々の生い茂る森を進んでいく。そうして新たな場所での生活が始まった。

やはり避けられている。
ドラウクロウは周囲の気配からそう感じていた。
森で生活をするようになってから余り時が経っていないとはいえ、森の長――オルドレントへの挨拶は済ませている。
自身の境遇を説明し、この森で暮らす許可を得たのだが、以前暮らしていた所とあまり状況は変わらなかった。ひとつ前にいた場所でもドラウクロウを恐れる魔物が多く、肩身の狭い思いをしていた。
稀にこの森へ、冒険者という組織に加入している人間がやって来る。
その冒険者に襲われた魔物を助けたりはしているのだが、それでも状況はさほど変わりはしない。
（仕方のないことだ。気にしてもしょうがない）
ドラウクロウはそう考え、些細なことだからと諦めた。だが、その表情は少し悲しげだった。
そうして森での生活に慣れてきた頃、奇妙な人間と出会った。
歳のほどは二十代前半だろうか。性別は女性で、肩あたりで切り揃えられた綺麗な黒髪に、黒い瞳という珍しい容姿をしていた。

（また人間がやって来たのか！　忌々しい！）
人間を嫌っていたドラウクロウは出会い頭に彼女へと攻撃を仕掛けたが、これを呆気なく防がれてしまう。
その後も、木の幹すらも容易く切り裂く爪や、自慢の脚力からの突進、地の利を使っての攻撃を仕掛けるも、すべて半透明の障壁に阻まれた。
彼女はその間、ドラウクロウへ説得を試みていたが、彼は聞く耳を持たず、結局は力ずくで動きを封じられることとなった。
そんな出会いから始まった一人と一匹だったが、少し時が経った頃には気軽に会話できるまでになっていた。
彼女は自身のことを〝ナナシ〟と名乗った。
馴染みのない発音であり、人間が使うアドルリヒト語ではないとわかった。
彼女は自身のことをあまり語りたがらない。必ず決まった時間にオルドレントの森を訪れては、決まった時間に帰っていく。契約しようとすることもない。確かなのは、彼女がモンストルム語を理解し、そして話すということだった。
ドラウクロウもまたそんなナナシを気遣い、無用な詮索はしなかった。
彼女が語ることは、ドラウクロウにとって初めて聞く話ばかりで、新鮮な気持ちにさせてくれた。
そして彼女もまた、普段は口にしないような話をしてしまうくらいに、ドラウクロウに心を許す

ようになっていった。
仲が深まると、ナナシに懐いたドラウクロウが彼女に相談を持ちかけることもあった。
内容はナナシに太刀打ちできるくらい力を付けたいというもの。戦ったのは最初の一回のみだったが、ドラウクロウはその時の敗北をずっと気にしていたらしい。
その相談に乗ったナナシは、ドラウクロウと一緒に特訓に付き合うと口にした。
まずは普通に模擬戦から始まり、次にナナシが作った魔法の球をドラウクロウが咥えて取ってくるという脚力の強化。森に隠れたナナシをドラウクロウが探す索敵の練習。ナナシが魔法で操るロープを引っ張って、顎の力を鍛える特訓。
その他にも様々な特訓を行う日々が続いた。
こんな時間がいつまでも続けば……。月並みな言葉だが、ドラウクロウはそう願うようになっていた。
しかし、時の流れは残酷だ。平穏な時間は長く続くことはなかった。
ナナシが森に滞在する時間が縮まり、森へ来るのが何日か置きになり、そしてやがてオルドレントの森へ来ることはなくなった。
それならば、今度はこちらからナナシの住んでいる場所へ行ってみよう。
ドラウクロウはそう考えると森を出て、以前彼女から聞いた情報を頼りに人里を探した。
やがて、ナナシが住んでいるだろう街へと辿り着いたのだが……。

そこで目にしたのは、城壁や建物が崩れ落ちた街の様子だった。

※　※　※

ホレスレット家の一室で目を覚ましたドラウクロウは、ボソリと呟いた。
「懐かしい夢だ……」
ちなみに結局、ナナシは無事だった。
辿り着いた街で、彼女は街の復興に携わっていたのだ。ドラウクロウとも無事に街で再会している。
街が荒れていたのは、後々まで語り継がれる災害によるものであった。
その後もナナシはオルドレントの森へ通ったが、寄る年波には勝てず七十歳を過ぎた辺りで息を引き取った。
昔を懐かしむような表情を浮かべた後、ドラウクロウはのそりと立ち上がる。
彼の首には魔物が扱う言語――モンストルム語をアドルリヒト語へ翻訳する首輪型の魔導具がはめられていた。今はただ石を首輪にしたものではなく、見栄えの良いものに取り替えられている。
その魔導具によって、彼は人と言葉を交わすことができている。
かつてはナナシのように、モンストルム語を理解できる人間もいた。

しかし今では姿を消し、彼が人間と話したのは久方ぶりのことであった。
（今日は親睦会とやらを行うのだったな）
彼がアドルリヒト語を話せるようになってから、約一週間が経過している。
未だホレスレット家で働いている使用人達との仲は、あまり進展していない。
この親睦会で怖がられることがなくなれば良いのだが……。そう考えているとドアがノックされ一人の少年が入ってきた。
「おはよう、ドラウ。調子はどうかな」
声を掛けてきたのはこの家の次男、ユータ・ホレスレット。優しい印象の目がナナシに似ていて、どことなく懐かしさを感じさせる。
そんな彼にドラウクロウは「問題ない」と返した。
「それじゃあ、今日の衣装から決めていこうか」
「ああ、よろしく頼む」
二人は部屋を出ると、準備のため二階へと足を進めた。
（ここには自分を襲って来る者はいない。当時の彼女より仲良くなるのは簡単だ）
彼はかつて自分を力任せに説得して親交を深めてきたナナシの姿を思い浮かべ、意気込むように内心でそう呟いた。

第三話　親睦会

今日は待ちに待ったドラウクロウの親睦会だ。
ドラウに翻訳の魔導具を作ってから約一週間が経ったが、依然として周りからは恐怖の対象として見られている。だが、少しは慣れてきているのか、あからさまに怖がる人はいなくなった。
今回の親睦会でその印象を一気に変えてみせよう。
そのために現在は自室にドラウを呼んで、親睦会に着ていく服を選んでいた。
「なんだか、気分が悪そうだね。大丈夫？」
「問題ない。ただ、緊張しているだけだ」
「それなら良いんだけど。嫌だったら遠慮なく言ってね。今回の主役はドラウなんだからさ」
「ああ、善処しよう」
「それじゃあ、どんな衣装にするか決めようか。といっても選択肢はもう絞ってあるんだどね」
「ユータ殿に一任しよう。我を自由に着飾ってくれ」
「それじゃあ、これから着せていくよ」
「まだあるのか……？」

ドラウは少し疲れたような表情を浮かべている。
選択肢は絞っていたはずが、いざ着せ替えていくと「他の可能性を見てみよう」と魔が差し、彼を着せ替え人形のようにしてしまった。
ふと、この光景に既視感を覚える。
「ああ、そういえば父さんと母さんの着せ替え人形になったことがあったなぁ」
王都の舞踏会に行く前に衣装を選んだ時のことだ。あの時は同じ服の色違いや、肩に羽のついたド派手な服など色々と着させられた。
それを思い出すと、こう何着も着替えさせるのは遅まきながら申し訳なく思える。
しばし考えを巡らせてから、一セットの服を手にとってドラウに着せた。
「これだ！」
「我は……この姿で人前に出なくてはいけないのか？」
しっぽを床につけて憂鬱そうな彼に、自分は正直に告げる。
「正直、滑稽というか……失笑を買うかもしれないけど、それでも見た目が怖いという印象は和らぐと思うよ」
一呼吸置いて言葉を続ける。
「これくらい大げさにやるからこそ意味があるんだよ」
ドラウは少し思案してから口を開いた。

「ふむ、一理あるな……よし、心を決めよう。ユータ殿に一任したからには文句を言うわけにはいかない」
「それじゃあ、衣装はこれで決まりだね」
こうして少々時間は掛かったものの、衣装が決まった。
時間は午後の六時。外は既に夜の帳が降りている。
今回の主役であるドラウクロウには別室で待機してもらい、自分は準備を手伝いがてら料理人達にドラウのことを言葉のみで紹介することにした。
怖いと言われているが、それは外見だけの話である。
それなら、内面やふとした拍子に見せる犬っぽい仕草の話をして、彼らの持つドラウへの悪印象を和らげることができればと考えたのだ。
そうして準備とドラウの内面のアピールに走り回っていると、予定の時間がやってきた。
ダイニングルームには様々な料理が並べられており、普段置いてある長机も今回は撤去され、代わりに複数の丸テーブルが設置されている。
食事も人数に合わせて大量に用意してあり、お酒の方も準備できている。
自分は準備が完了したことと父さん達が来たことを確認してから、別室にいるドラウを呼びに向かった。

「そうか、もう準備ができたのか」
「緊張してない？　大丈夫？」
「大丈夫だ。ではダイニングルームに赴き、笑いをかっ攫おうではないか」
せっかく意気込んでいるドラウに、その格好では爆笑はおろか失笑も怪しい――とはさすがに言えない。言葉を呑み込み、大きく頷く。
そうして、既に人が集まっているダイニングルームの扉を開けた。
その瞬間、多くの視線がこちらへ向く。それと同時に、一つの大きな笑い声が部屋に響いた。
他は驚いているか、はたまた失笑を堪えているのか言葉が出ない様子だ。
その間も、ただ一人だけ――カイル兄さんの笑い声だけが部屋に響いている。
見た目の怖さを軽減するために、ドラウにはまるで道化師のような衣装を着てもらっている。
もこもことしたカラフルな服に赤と白の横縞模様の三角帽子、赤鼻の飾り、ふんわりとした赤い靴。他にも細かな飾りを着けてもらい、随分ユニークな見た目になっている。
「いや～、笑わせてもらった。ずいぶんと面白い格好だな」
ようやく笑いやんだ兄さんは、一番に声を掛けてきた。
「ユータ殿に頼んだのだが、我もこうなるとは思いもしなかった」
ドラウは一呼吸置いて言葉を続ける。
「だが、これで怖くはなくなっただろう？」

「ああ、むしろ可愛くなったんじゃないか」
「ふっ、やめてくれ」
兄さんのからかうような言葉に、ドラウは苦笑した。
二人が会話をしている間に、会場内の変な雰囲気は薄れてきた。
そしてデルバード父さんが前に出ると、場の空気が完全に仕切り直される。
「皆、今回はドラウクロウの親睦会の準備をしてくれて礼を言う。まだ、彼のことを知らない者もいると思うが、この場で少しでも人となりを知ってみてほしい。外見だけではわからなかった――」
父さんはドラウに向いていた視線を自身に集めると、乾杯の挨拶をする。
少しドラウについて語った後、ついにその時がやってきた。
「――あまり長くなっては折角の料理がもったいないな」
父さんは一度咳き込んだ後、持っていたグラスを少し持ち上げた。
「それでは――乾杯！」
乾杯！　とみんなの声が揃い、親睦会が始まった。
親睦会。それは互いに親しみ合い、仲良くする目的で開かれる会。
今回の親睦会はドラウクロウのために開かれた、ドラウと仲良くなるための催し物である。
しかし本人はというと、乾杯を見終えてからの第一声が……。
「……ふむ」

「いやいや、ふむ。じゃないからね？」
こちらの言葉にドラウは黙り込む。
「内気か、喋れよ」
思わず、命令形のきつい言葉が口からこぼれた。
怒っているわけではないのだが、如何せん彼は動こうとしない。
彼のための親睦会なのだから、自分から積極的に行くべきではないだろうか。
……とは言うものの、緊張しているならば強要するわけにはいかない。
「仕方ない」
ため息を吐いた後、動く様子のないドラウの代わりに行動をする。まずはあっちから。
自分はセレア姉さんと妹のアイリスに近づいて声を掛けた。
「姉さん、アイリス。ちょっといいかな」
「あら、どうかした？」
「あっちで一緒に話でも、と思ってね」
視線をさっきまでいた場所へ向ける。
ドラウは一人で食事を取っている。
四足歩行にもかかわらず、後ろ足で立って器用に皿へ肉類を盛っていた。
あの手でどうフォークを掴んでいるのかが気になるものの、目線を姉さん達に戻した。

「彼、器用なのね」
「あれを器用の一言で済ませるんだね。それで、どうかな？」
「姉弟なのに、なに遠慮してるのよ。ほら、行くわよ」
……遠慮か。
そんな気を使っているわけではなかったが、姉さんからはそう見えたのか。
――姉さん相手には前世からそうだったからな。癖なのかね。
昔を思い出しながら、内心で言い訳を独りごちて、姉さんとアイリスの後に付いて行く。
ドラウの所に戻ると、食事を取っている彼に早速声を掛ける。
ちなみに食べる姿勢は犬と変わらない。その方が食べやすいのだろう。
「ほら、ドラウ。姉さん達と話して緊張をほぐそうか」
朝、衣装決めをする前に彼は緊張をしていると言っていた。
最初に兄さんと軽く話した時はその様子が見えなかったが、親睦会が始まったと理解してまたぶり返してしまったのだと思われる。
「セレア殿とアイリス殿だったな」
そんな中、はじめに声を掛けたのはドラウのほうだった。
「覚えていてもらえて嬉しいわ、ドラウクロウ」
「ユータ殿と同じく、ドラウと呼び捨てで構わない」

「そう？　それじゃあ、ドラウって呼ばせてもらうわ」
「アイリスもアイリスって呼んで！」
こうして何事もなく会話は始まったが、調子が良かったのは最初だけだった。
その後は掛けられる言葉に反応するくらい。
アイリスは、やられ放題のドラウの身体で遊んでいる。姉さんは受け身な態度のドラウを相手に、会話を広げられずに苦戦を強いられていた。
姉さん相手ならまだ気軽に話せるかと思っていたが、何かを警戒しているように無愛想だ。
少しの間、ぎこちない雰囲気が続いたが、ドラウがやっと自分から口を開いた。
「一つ、聞きたい」
ドラウのその言葉は真剣味を帯びていた。
「本当に、我を……恐ろしく思わないのか」
顔を伏せて彼は言葉を続けた。
それは怖がられること、嫌われることを恐れているように見えた。
「怖いのなんて見た目くらいのものよ、それはこうして面と向かって話してみれば、自然とどこかに行くわ」
あなたは気にし過ぎなのよ、と姉さんは最後につけ加える。
「そうか……」

「そうよ」
ぎこちない雰囲気はいつの間にか消えたものの、代わりに妙な空気が流れている。
何か心境の変化があったのだろうか。
黙り込んでいると、陽気な声がこちらへ飛んできた。
「なんだか、辛気臭いですね～。せっかくの場なんですから、もっと明るく行きましょうよ」
声を掛けてきたのは料理長のリディルだった。
緑色の髪を右手で掻き上げ、左手に持ったグラスをあおる。飲んでいるのはワインだろうか。少し頬が赤い。
ひょうきんな態度でやって来たのだが、よく見ると腰が引けている。
お酒の力を借りてどうにか声を掛けてきたのだろう。いつもの優しそうな表情からは想像できない勇気だ。なんともありがたい。
「そうだな、せっかくの場だ。少しばかり羽目を外しても良いかもしれんな」
「そうそう。気を張ってちゃ、楽しい会も無駄になってしまいますからねぇ」
ドラウの言葉に大きく頷くリディルだが、やはり腰が引けていた。
グラスの中身を一気に飲み干した彼は、意を決したように一歩ドラウへ近づいた。
「ドラウクロウさんはこの料理、食べてくれましたか～？」
「この料理を作ったのはあなただったか」

「その皿に載っているのはユータ様と一緒に作った奴ですね。こっちのもおすすめなんですよ」
彼は料理をドラウの皿に盛って差し出した。
それを食べるとドラウが感想を言い、二人は自然と料理についての話を広げていた。
リディルが雰囲気を良くしてくれたお陰で、遠慮がちだったドラウの表情が明るくなった。
それを見たからか、遠巻きに窺っていたメイドの一人が、ドラウの元へやって来る。
「あの、触ってもよろしいでしょうか……？」
少し気が引けるのか、おどおどしていた。
ドラウはそんな彼女に自ら近づいて、足元へ座り込む。
「遠慮することはない。存分に触ってくれて構わないぞ」
ドラウは他の者にも聞こえるよう、少し声を張って言った。
すると、少しずつだがドラウの周りには人が集まり始め、一週間前の状況が嘘のように変わっていった。どのように毛の手入れをしたのかと、聞く人も出てきたほどだ。
だが、これで終わりではない。ドラウを怖がる人が、ゼロになったわけではないのだ。
むしろここからが本当のスタートと言ってもいい。今は屋敷のみんなが慣れ始めたばかり。
ゆくゆくは街に出て、領民と楽しく会話を繰り広げられるまでになることが目標だ。
明日からもっと距離を縮めていこう。
ジュースを飲みながら一人思考を巡らせていると、すっかりごきげんな様子のドラウに声を掛けられた。
「ユータ殿もこっちで一緒に話そうではないか」
楽しそうな彼の様子がまるで自分のことのように嬉しく思えて、自然と頬がゆるんだ。
「ああ、今行くよ」

立ち読みサンプル
はここまで

第四話　街へ出る許可を

親睦会を無事に終え、ドラウも使用人達と程よく馴染むようになってきた。それから一週間ほど経つ頃には、彼の様子は前よりも明るいものへと変わっていた。
「おはよう、今日はいい天気だな。だが、たまには雨も降って欲しいものだ。いっそのこと夕立ちになってくれれば良いのだがな」
こんな調子で、見かけたメイド達に挨拶や軽い会話ができるようになった。
そして、父さんから屋敷内であればある程度自由に行動できる許可を貰えたので、ドラウは暇さえあれば自分の部屋へやって来る。
それからは食事や運動、気分転換の時もドラウと共に行動するようになった。
直近での大きな変化を挙げるならば、悩みごとを打ち明けてくれたことだろうか。